

# アメリカ民主主義の本質

## ターナーとアーノルド理論に触発されて

皇學館大学

深 草 正 博

### はじめに

今回の研修の旅はアメリカ合衆国の中西部であった。そして中西部といえば直ちにフロンティア開拓の歴史を思い出す。しかもまさにここそアメリカ民主主義の発祥の地でもある。100年以上前にターナーがそのことを見事に論じた。しかし一方、わたし自身が『環境世界史学序説』（国書刊行会、2001年）を出版して以来、アメリカの環境とりわけ森林破壊に関して特別な関心を払ってきた。過去300年間でアメリカの森が激減したことを知っていたからである。旅行中常にそうした観点から風景を眺め続けた。拙著出版後に読んだD・アーノルド『環境と人間の歴史 自然、文化、ヨーロッパの世界的拡張』（飯島昇藏・川島耕司訳、評論社、1999年）はそのための確かな視点を与えてくれた。そこで今回は、ターナーとアーノルドの理論を中心に据えつつ、表題についてしばらく考えてみようと思う。

### 1. ターナーのフロンティア論

フレデリック・J・ターナーが、アメリカ史におけるフロンティアの意義についての論文「アメリカ史における辺境の重要性」（1893年）『アメリカ史における辺境』（松本政治・嶋忠正訳、1973年、北星堂書店、所収）を發表してから一世紀が経過した今日においてなお、その学説が批判され、あるいはその有効性が論じられていることを見るにつけても、その寿命の長さに驚嘆せざるをえない、と岡田泰男氏は述べている（『フロンティアと開拓者』東京大学出版会、1994年、291頁）。ここではその批判の詳細を論じえないが（それについては、渡辺真治『フロンティア学説の総合的研究』近藤出版社、1980年を参照）、ターナーの理論がかくも長期にわたって大きな影響を及ぼしていることは確実である。

さて、アメリカにおいてフロンティアが消滅したのは、1890年のこととされている。ターナーの先の論文はその3年後に書かれたものだ。本稿に関わる限りで、そのおよその論点を述べれば次のようになる。

今日に至るまでアメリカの歴史は、その大半が「偉大な西部」の植民化の歴史である。自由地域の存在、それが絶えず侵食され後退する、そしてアメリカ人の開拓部落が西へ西へと進出する、これらがアメリカの発展を説明する。辺境はその波の外端部 野蛮と文明の接点であった。辺境の前進は、ヨーロッパの影響から絶えず遠のいて、アメリカの線上での不断の独立の生長を意味した。辺境は様々な自然の境界線による特徴を示すが、そのいずれもインディアンとの戦いで勝ち取ったものである。毛皮の取引をする交易商人がインディアンの住む荒野へ入り込み、文明への道を開いた。...

大西洋沿岸は圧倒的に英国系であったが、辺境へは旧大陸からの移民が絶え間なく自由な土地へと流れ込んだ。そのため、辺境のルツボの中で移民たちはアメリカナイズされ、開放され、融合されて、国籍の点でも性格の点でも英国的でないひとつの混合民族となった。こうして辺境が米国民のために混成的な国籍の形成を促進した。...

しかし辺境の最も重要な影響は、アメリカおよびヨーロッパにおける民主主義の推進であった。辺境は個人主義を生み出す。というのも複雑な社会が荒野のために一挙にして家